

II 調査結果の分析

第1章 家庭生活における男女平等 家事・育児・介護について

女性も男性も社会的性別の概念にとらわれることなく、個性と能力を十分に発揮し、あらゆる分野で対等に参画する男女平等参画社会を実現して、豊かで安心して暮らせる、しかも活力ある清瀬市を築いていくために、平成18年7月に「清瀬市男女平等推進条例」（以下「条例」）が制定されました。条例では、男女平等参画社会の形成を図るために以下の5つの基本理念が定められています。

【清瀬市男女平等推進条例】

（基本理念）

第3条 男女平等参画社会の形成を図るため、次の各号に掲げる事項を基本理念として定める。

- （1） すべての人が、個人としての人権を尊重され、性別を理由として直接又は間接に差別的取扱いを受けることなく、一人ひとりの個性と能力を十分発揮できる機会が確保されること。
- （2） 女性と男性が、性別による固定的な役割分担にとらわれることなく、自己の意思と責任による多様な生き方の選択が尊重されること。
- （3） 女性と男性が、家事、子の養育、家族の介護その他の家庭生活における責任を分かち合うとともに、家庭生活と社会活動を両立できるような環境が整備されること。
- （4） 女性と男性が、社会の対等な構成員として、さまざまな領域における活動の方針立案及び決定の過程で共同参画する機会が確保されること。
- （5） 女性と男性が、互いの性を理解し尊重し合うとともに、性に基じた健康が生涯にわたり維持されるよう配慮されること。

条例の基本理念を踏まえ、第1章では、家庭生活における男女平等に関する意識・実態について聞きました。

問1 「男性は仕事、女性は家事・育児」への考え方

「男性は仕事、女性は家事・育児」という性別による固定的な役割分担の考え方について、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」という回答が51.6%と多く、男女別では、女性55.8%、男性45.8%となっています。それに対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」では、女性42.5%、男性53.7%となり、とくに「そう思う」では男性が女性の4倍近くになっています。

今回の調査では、性別による固定的な役割分担の考え方について、全体では否定的な考えを持つ人が多くなっています。男女別では、女性は否定する考えを持つ人が半数を超え、男性は肯定する考えを持つ人が半数を超えるという差がありました。

問2 子育てに対する考え方

子育てについて、「子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきである」「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしくしつけるほうがよい」という社会的性別に基づく固定的な考え方に関する質問、及び、「女の子も、経済的自立ができるように育てるほうがよい」「男の子も、家事ができるように育てるほうがよい」「父親ももっと子育てに関るほうがよい」とする男女がともに家庭生活と社会活動の両立ができるような考え方に関する質問をしました。

その結果、「女の子も、経済的自立ができるように育てるほうがよい」「男の子も、家事ができるように育てるほうがよい」「父親ももっと子育てに関るほうがよい」について、「そう思う」人が男女ともに多くなっています。特に、家事・育児への関りを肯定する意見を持つ男性が多い結果からは、男性の固定的な役割分担意識が変化していることが伺えます。

「子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきである」という考え方については、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定する人が前回調査よりやや増え全体で7割以上を占め、母親役割については、男女ともに肯定する人が多いという状況が続いているという結果になりました。

一方、「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしくしつけるほうがよい」については、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」とする人が前回調査よりやや減り、特に「そう思う」男性が前回調査より10ポイント以上減っていて、性に基づく「らしさ」についての男性の意識の変化が見られます。

問3 家事の担当

問3-1 家事についての考え

家事はおもに誰がしているかをたずねたところ、「おもに自分がしている」女性は69.5%男性は9.0%と男女差が大きく、性別役割分担が実態として根強い結果になりました。家事の大半はいまだに女性が多くを担っている現状から、配偶者（事実婚を含む）・パートナーがいる人に家事に対する考えを聞いたところ、女性は「配偶者にもっと家事を分担してほしい」とする人が最も多く、男性は、「家事は女性がおこなうほうがよい」とする役割分担を肯定した考えを持つ人がいる一方で、「分担をしたいが家事の仕方がよくわからない」と答える人も多くなっています。

問4 安心して子どもを産み育てていける社会にするために必要なこと

安心して子どもを産み育てていける社会にするために必要なこととして、「働く時間の短縮をすすめるなど労働条件をよくする」「男女ともに取れる育児・介護休業制度の活用と社会環境を充実する」「親の就労形態や通勤時間に応じた保育施策をすすめる」「家計や教育費についての相談窓口や経済的支援策を充実する」「子育てを助け合う地域の安全・安心なネットワークづくりをすすめる」「出産や子育てについて気軽に相談できる窓口をととのえる」「男性の家事・育児への積極的な参加をうながす」「ひとり親（母子・父子）家庭に対する総合的な支援策をすすめる」の項目のうち、もっとも必要と思われる順3つを選択してもらいました。

その結果、女性も男性も「男女ともに取れる育児・介護休業制度の活用と社会環境を充実する」ことが必要と回答した人が最も多くなっています。次に「親の就労形態や通勤時間に応

じた保育施策をすすめる」「働く時間の短縮をすすめるなど労働条件をよくする」と続いています。性別で見ると、女性は次に「男女ともに取れる育児・介護休業制度の活用と社会環境を充実する」(64.2%)「親の就労形態や通勤時間に応じた保育施策をすすめる」(49.6%)の順で、男性は「男女ともに取れる育児・介護休業制度の活用と社会環境を充実する」(56.6%)「働く時間の短縮など労働条件をよくする」(48.8%)が上位の項目となっています。

また「家計や教育費についての相談窓口や経済的支援策を充実する」では男性が40.4%必要としていることに対し、女性は27.0%と男女差が見られました。

問5 男性の介護への参加を進めるために必要だと思うこと

高齢者や病人の介護は、これまで女性（妻・子の配偶者・娘）の役割とされがちでした。

男性の介護への参加を進めるために必要だと思うことを「介護休業制度を活用できるような職場環境づくりをすすめる」「労働時間の短縮、在宅勤務、フレックスタイムの導入などを企業へ働きかける」女性が一方的に介護を担うことがないよう、家族間で介護の分担について話し合う」「男性の理解と協力のための啓発活動をすすめる」「介護について気軽に相談できるような総合窓口をととのえる」「日常的に介護者どうしが話し合える地域のネットワークづくりをすすめる」の項目のうち、あてはまるものすべてを選択してもらったところ、「介護休業制度を活用できるような職場環境づくりをすすめる」ことを女性も男性も最も必要と考えています。

次いで女性は「女性が一方的に介護を担うことがないよう、家族間で介護の分担について話し合う」(61.1%)「介護について気軽に相談できるような総合窓口をととのえる」(58.8%)となっています。男性は「労働時間の短縮、在宅勤務、フレックスタイムの導入などを企業へ働きかける」(57.5%)が次に多く、「介護について気軽に相談できるような総合窓口をととのえる」については、40.4%と、女性に比較して選択した人が少なくなっています。

また、いずれの項目も、女性が多く選択する結果となっています。

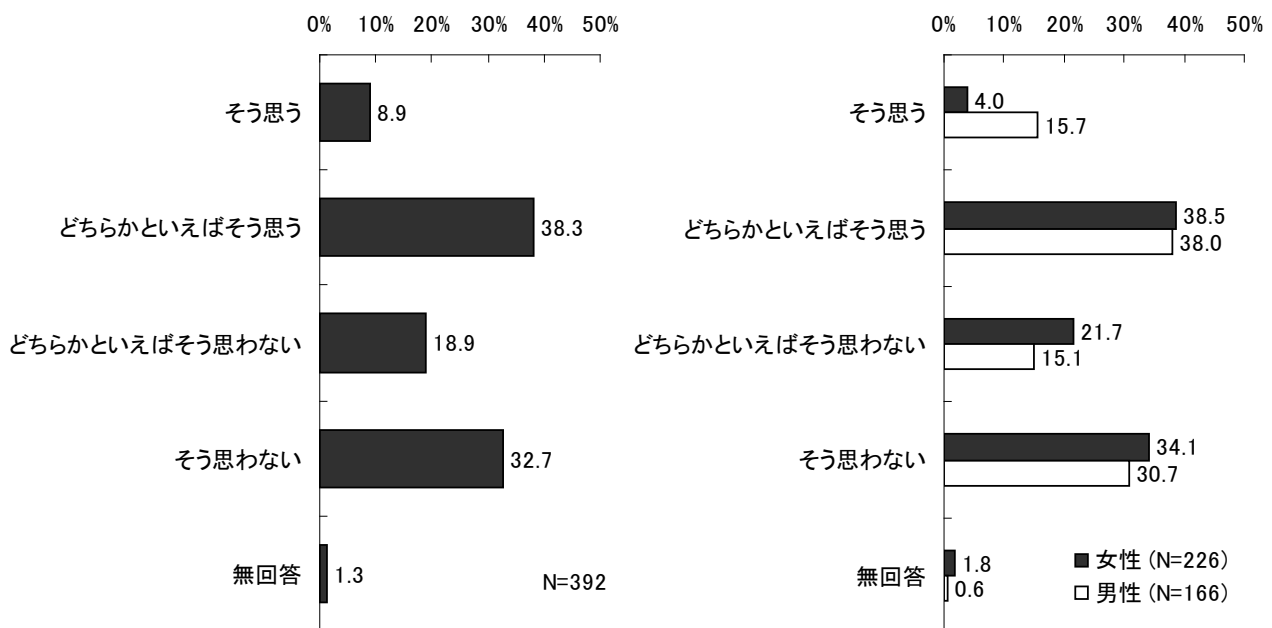
(1) 「男性は仕事、女性は家事・育児」への考え方

「男性は仕事、女性は家事・育児」という性別による固定的な役割分担の考え方について「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」をあわせると半数を超え、いずれも女性が男性を上回り、女性の方が性別役割分担を否定する人が多い。一方、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と性別役割分担を肯定する人は男性が多く、「そう思う」では、男性が女性より4倍近く多い。

問1. あなたは、「男性は仕事、女性は家事・育児」という考え方について、どう思いますか。(○は1つだけ)

「男性は仕事、女性は家事・育児」という考え方については、「どちらかといえばそう思う」(38.3%)が高く、これに「そう思わない」(32.7%)が続いている。また、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」(51.6%)は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」(47.2%)を上回る結果となっている。

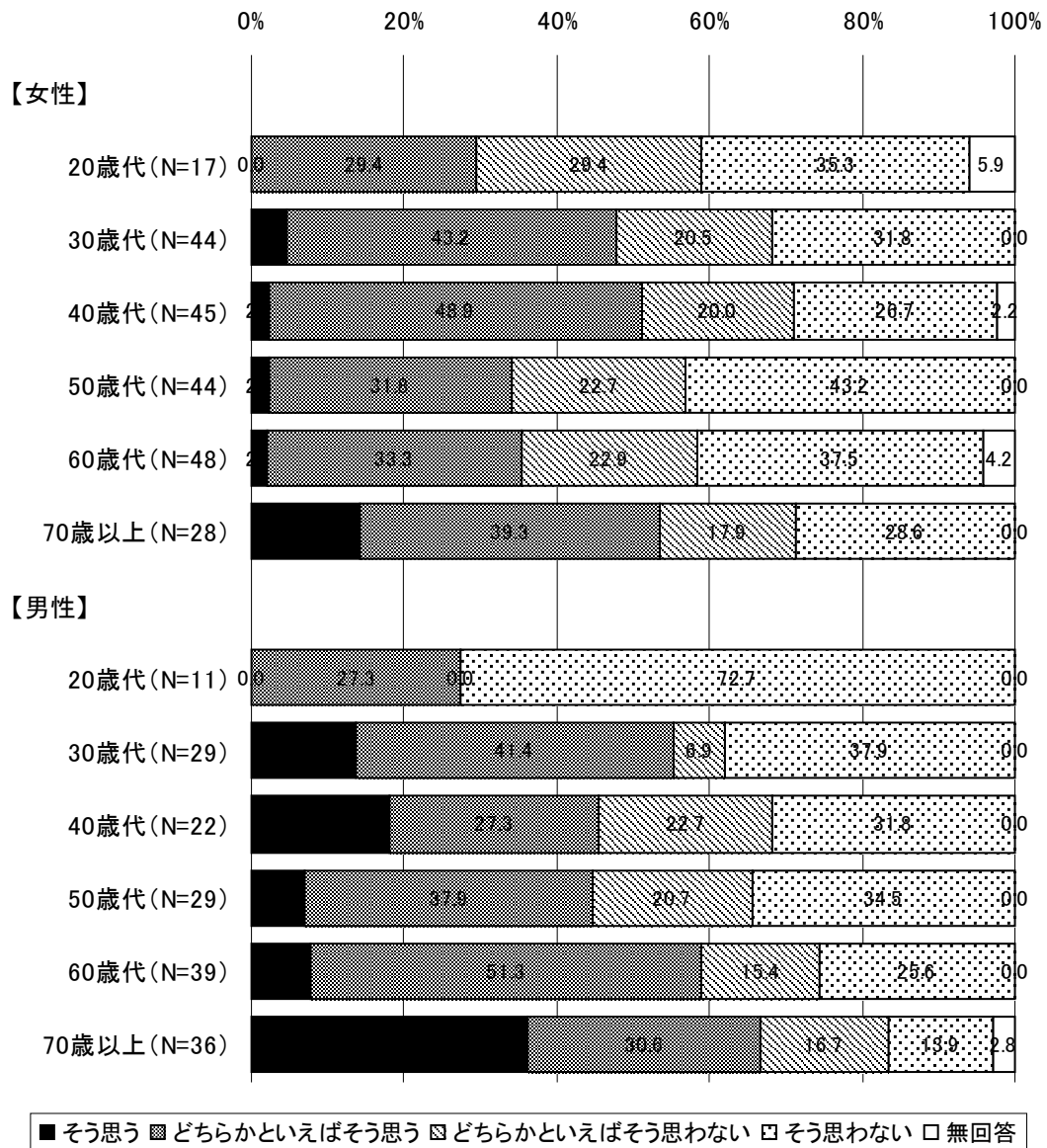
図1 「男性は仕事、女性は家事・育児」への考え方



【属性別の傾向】

性別では、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」が女性は55.8%、男性は45.8%、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が、女性は42.5%、男性は53.7%となっていて、女性の方が性別役割分担を否定する人が多い。

図2 属性別の「男性は仕事、女性は家事・育児」への考え方



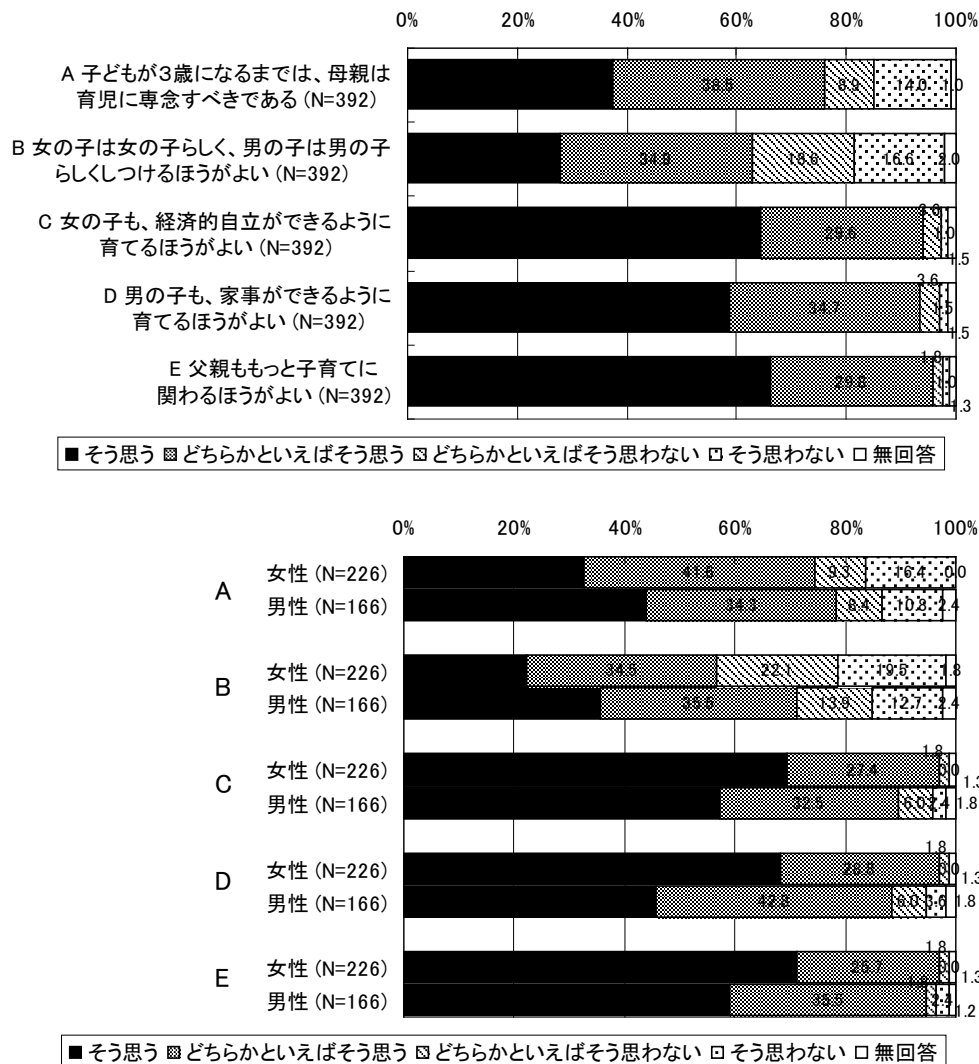
(2) 子育てに関する考え方

「子育て」については「父親ももっと子育てに関わるほうがよい」「女の子も、経済的自立ができるように育てるほうがよい」を「そう思う」人は6割を超え、「男の子も、家事ができるように育てるほうがよい」を「そう思う」人も5割を超えている。

問2. 子育てに関する以下のような考え方についてあなたはどのように思いますか。A～Eの項目について、あなたの気持ちに近いものを1つ選び、番号に○をつけてください。

子育てに関する考え方について、「父親ももっと子育てに関わるほうがよい」(66.1%)「女の子も、経済的自立ができるように育てるほうがよい」(64.3%)「男の子も、家事ができるように育てるほうがよい」(58.7%)は、「そう思う」が半数を上回っている。また、「子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきである」(37.5%)「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしくしつけるほうがよい」(27.8%)では、「そう思う」が低いが、「どちらかといえばそう思う」を合わせると、それぞれ76.0%、62.7%となった。

図3 子育てに関する考え方



【属性別の傾向】

男性では「子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきである」「女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしくしつけるほうがよい」とする性別による固定的な役割分担について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定する人が女性より多い。

女性では「女の子も、経済的自立ができるように育てるほうがよい」「男の子も、家事ができるように育てるほうがよい」「父親ももっと子育てに関るほうがよい」という、女性の経済的自立や男性の家事・育児への参加について「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定する人が、いずれも男性より多くなっている。

一方、「男の子も、家事ができるように育てるほうがよい」「父親ももっと子育てに関るほうがよい」という家事・育児への男性の参加を男性の5割から6割が肯定し、男性の性別による固定的な役割分担意識も変化していることが伺える。

〈子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきである〉について

※前回調査との比較

平成15年度調査では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」は68.5%、性別では「そう思う」女性が36.1%、男性が38.9%と男女がほぼ同じ傾向を示していた。

今回の調査では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」は76.0%と、「子どもが3歳になるまでは母親は育児に専念すべき」とする人が5年前よりもやや増えているが、性別では「そう思う」女性は32.7%、男性は44.0%と、前回の調査より女性は「そう思う」人が減り男性は増えていて、男女の意識差が広がっている。

今回の調査の性別・年齢別では、「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」と否定する考えを持つ女性は30歳代が38.5%と一番多く、男性では20歳代が36.4%と多いが、半数には達していない。

全体では、5年前と同じく、女性も男性も母親役割については肯定する人が多いという結果になった。

〈女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしく育てるほうがよい〉について

※前回調査との比較

平成15年度調査では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」は全体では63.4%、性別では「そう思う」女性が21.4%、男性が49.2%と女性に比べて27.8ポイント高く、男女の意識差があった。今回の調査では、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」は全体で62.7%、性別では「そう思う」女性は22.1%、男性は35.5%と、「そう思う」男性が前回と比較して10ポイント以上減っている。

今回は「女の子も経済的自立ができるように育てるほうがよい」「男の子も家事ができるように育てるほうがよい」とする考えを聞いたが、肯定する男性は4割から5割と多く、子育てに関する男性の意識の変化が伺える。

図 3-1 属性別の子育てに関する考え方
 (子どもが3歳になるまでは、母親は育児に専念すべきである)

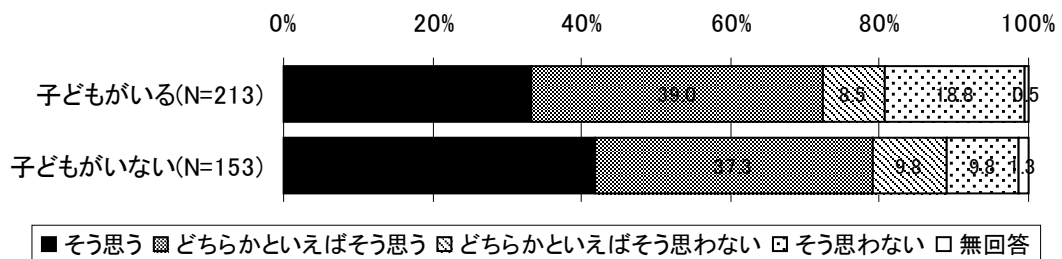
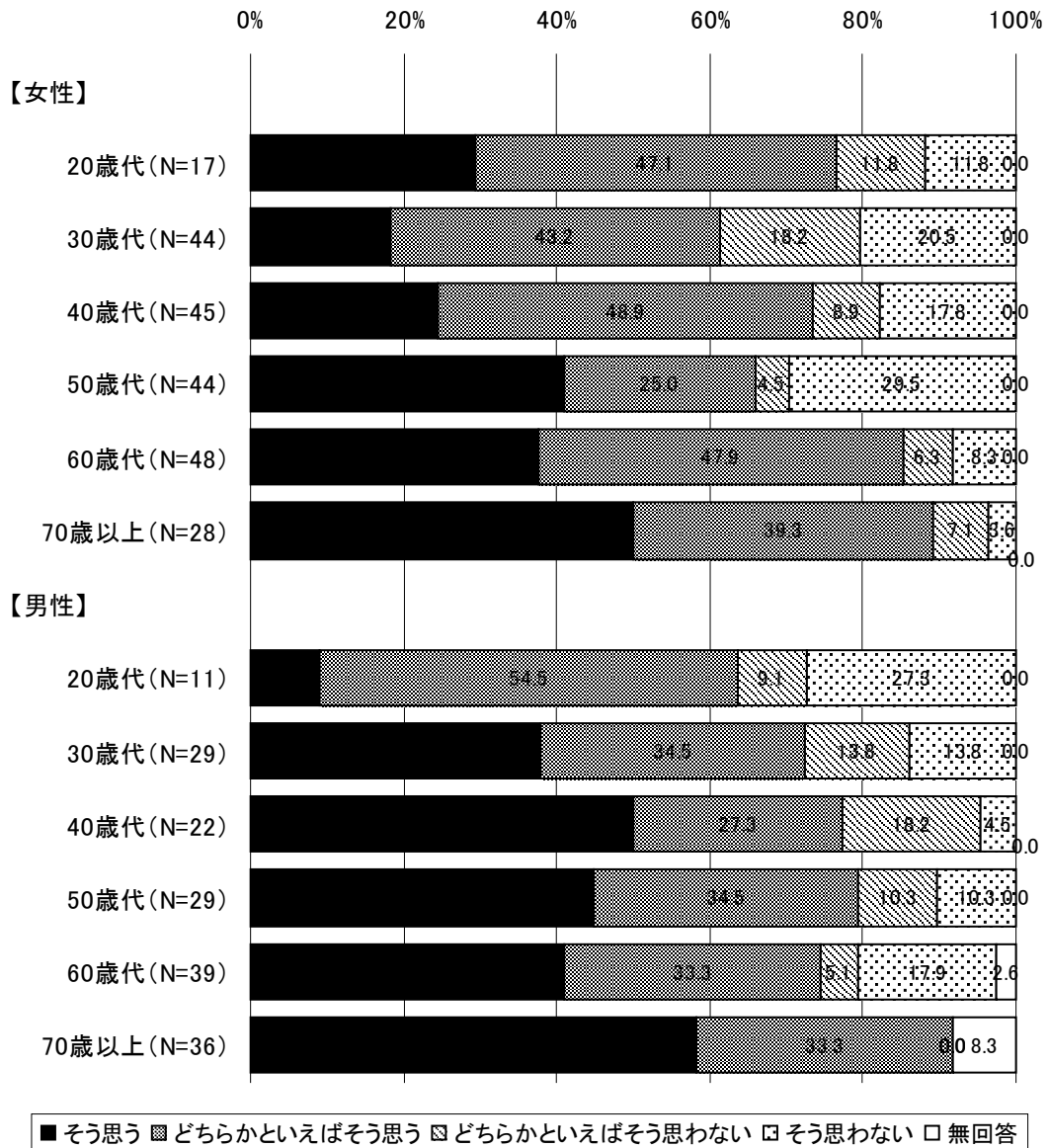


図 3-2 属性別の子育てに関する考え方
 (女の子は女の子らしく、男の子は男の子らしくしつけるほうがよい)

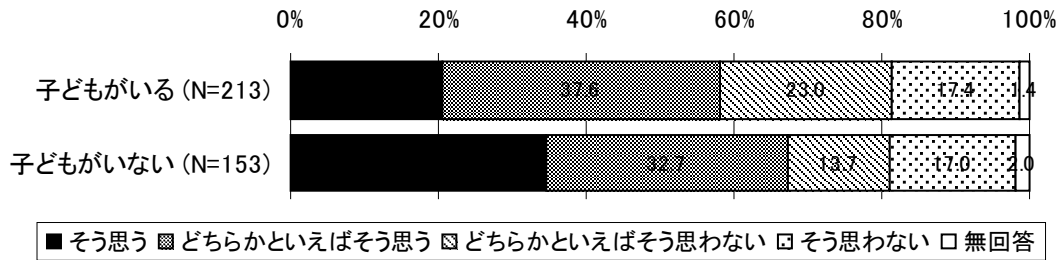
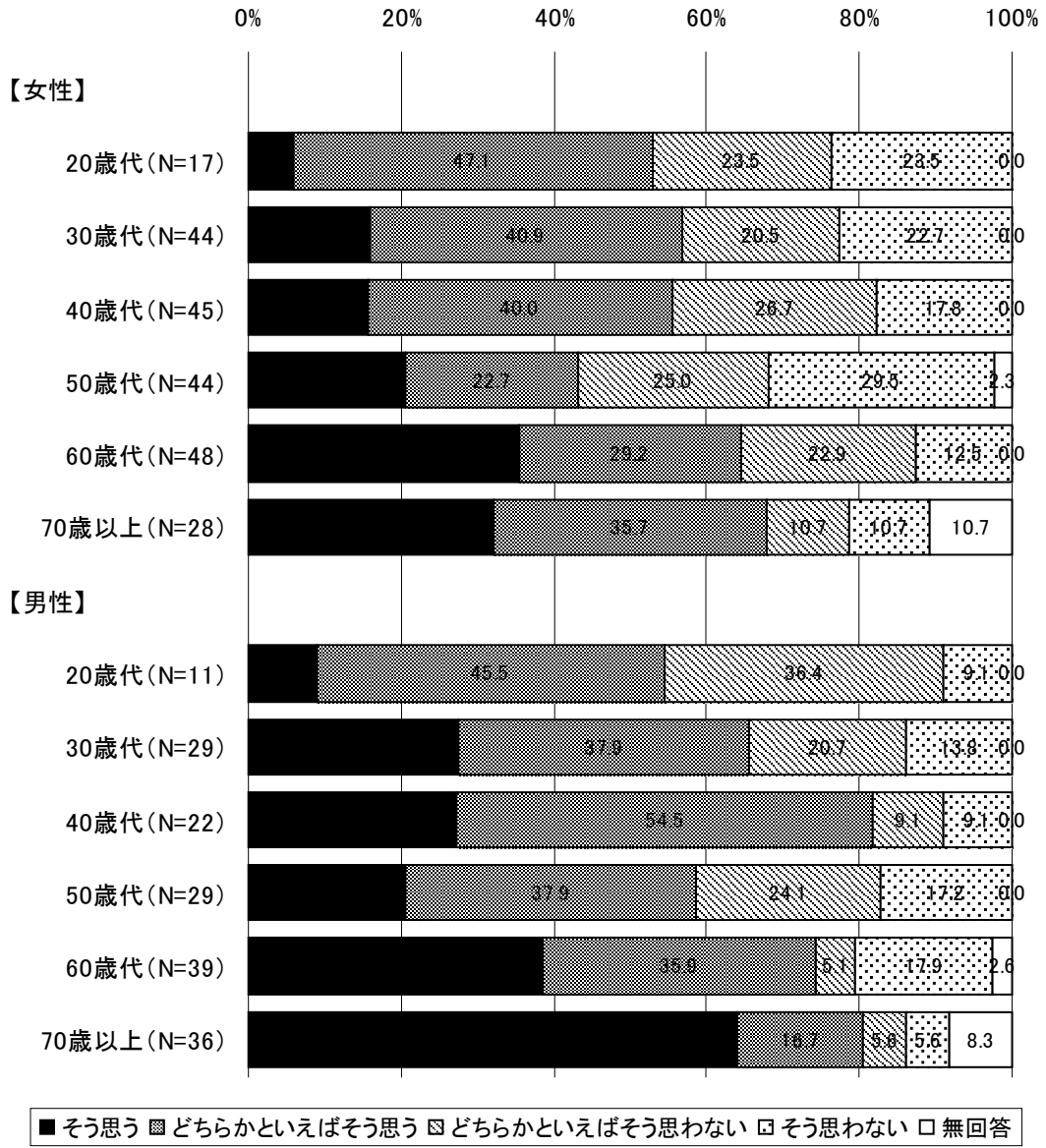


図 3-3 属性別の子育てに関する考え方
(女の子も、経済的自立ができるように育てるほうがよい)

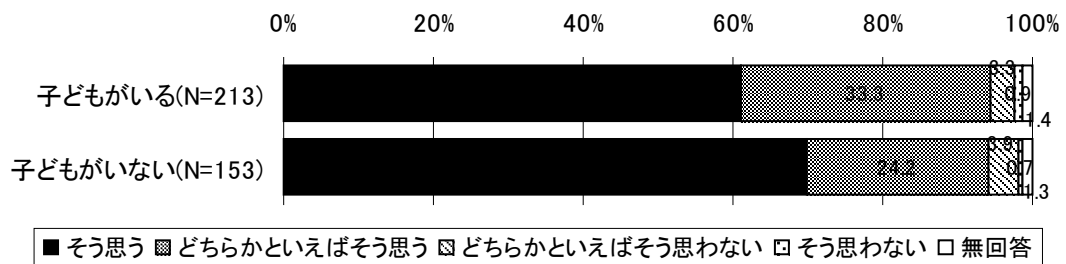
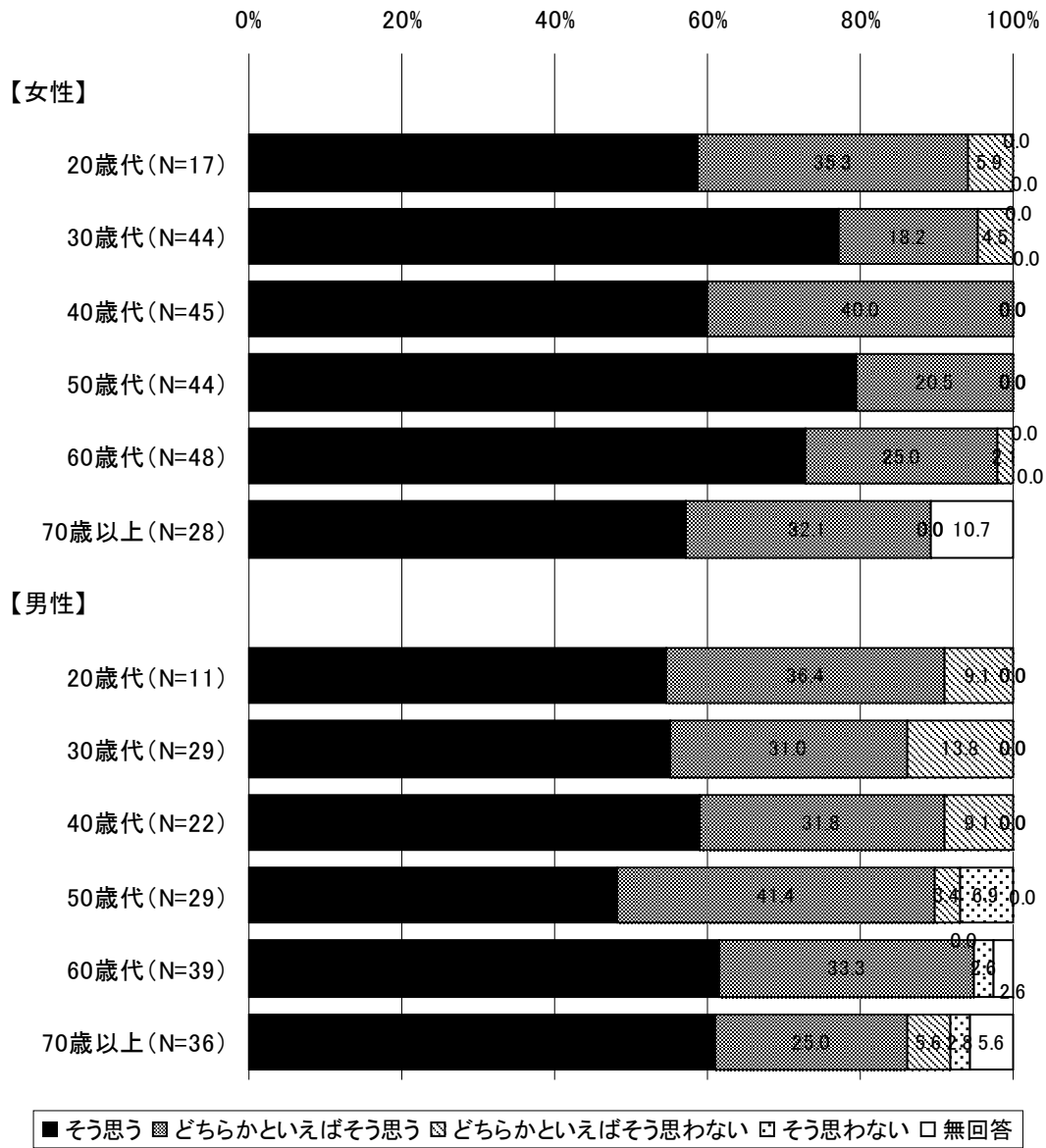


図 3-4 属性別の子育てに関する考え方
(男の子も、家事ができるように育てるほうがよい)

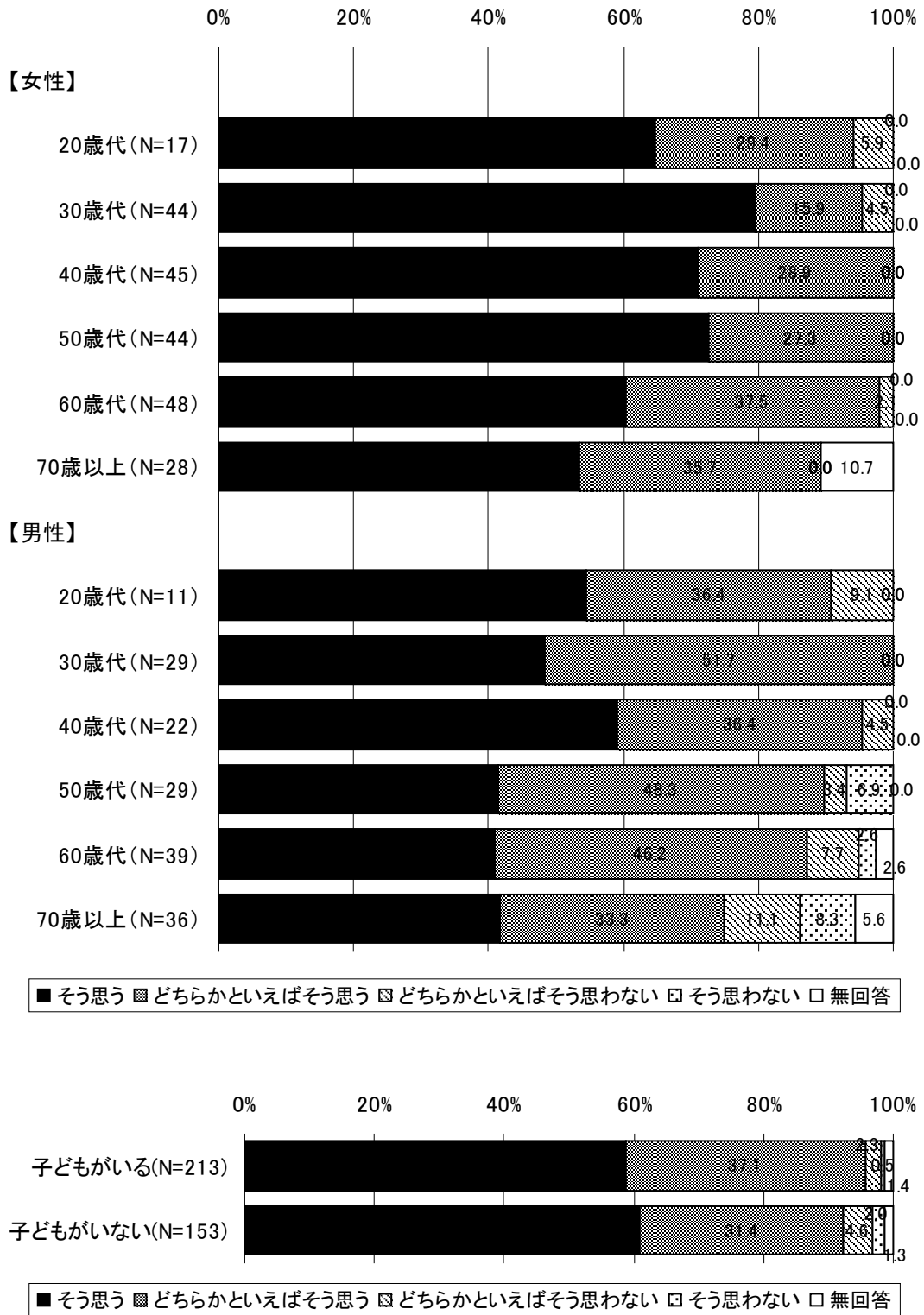
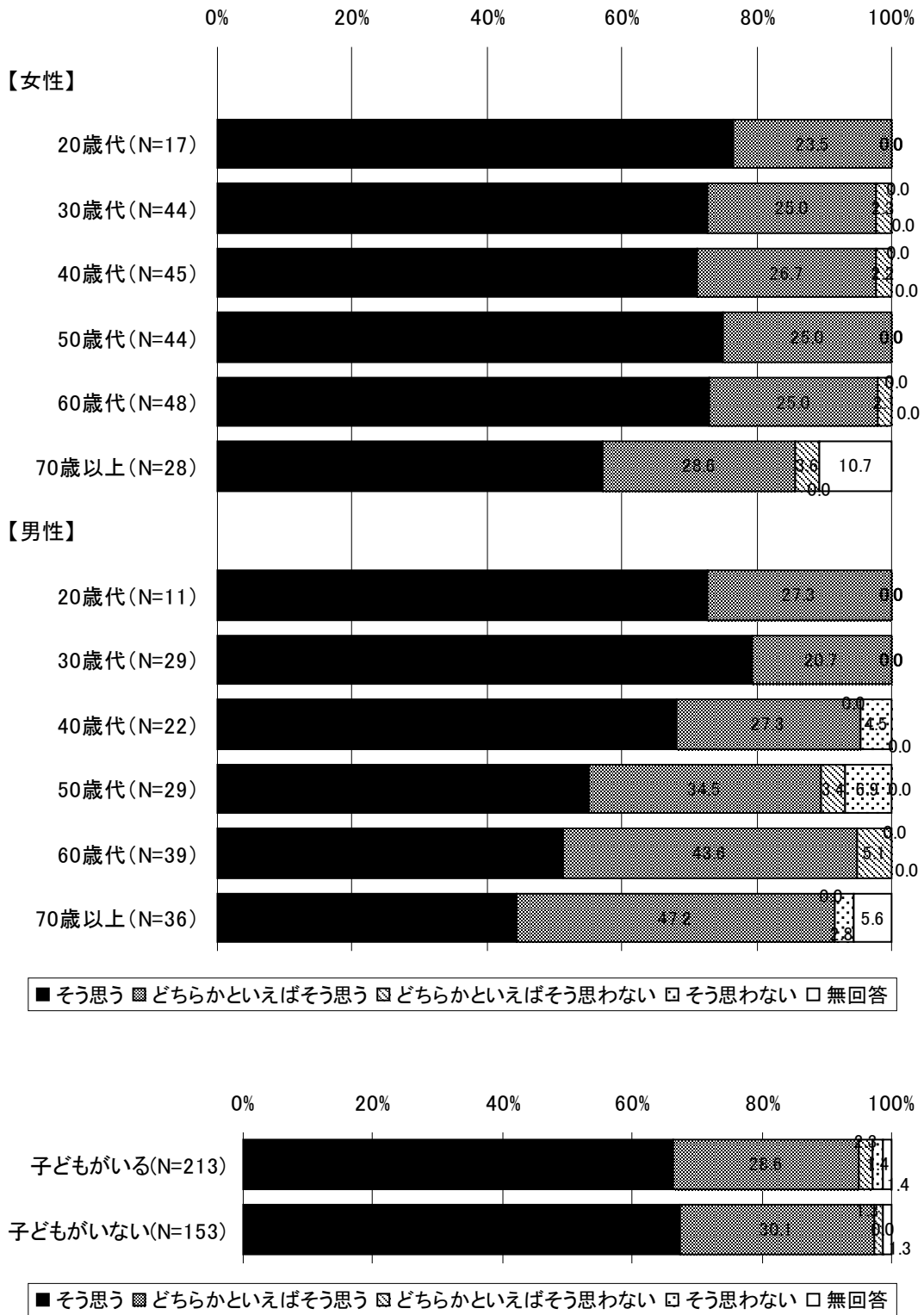


図 3-5 属性別の子育てに関する考え方
(父親ももっと子育てに関わるほうがよい)



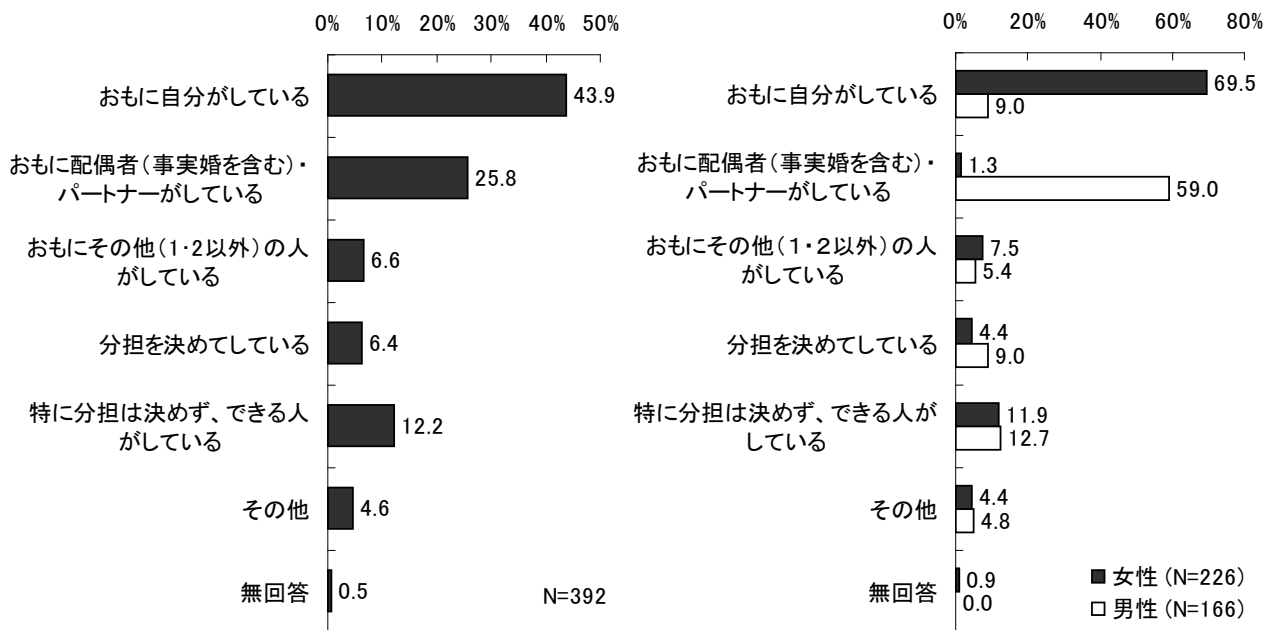
(3) 家事の担当

女性は「家事をおもに自分がしている」と約7割近くが答え、男性は、「おもに配偶者がしている」人が6割近く、「家事をおもに自分がしている」と答えた男性は1割に達していない。「家事は女性の役割」とする考え方が実態としても多いことがわかる。

問3. あなたのご家庭では、家事はおもに誰がしていますか。(○は1つだけ)

家事の担当では、「おもに自分がしている」が43.9%で高く、これに「おもに配偶者」(25.8%)、「とくに分担は決めず、できる人がしている」(12.2%)が続いている。

図2 家事の担当

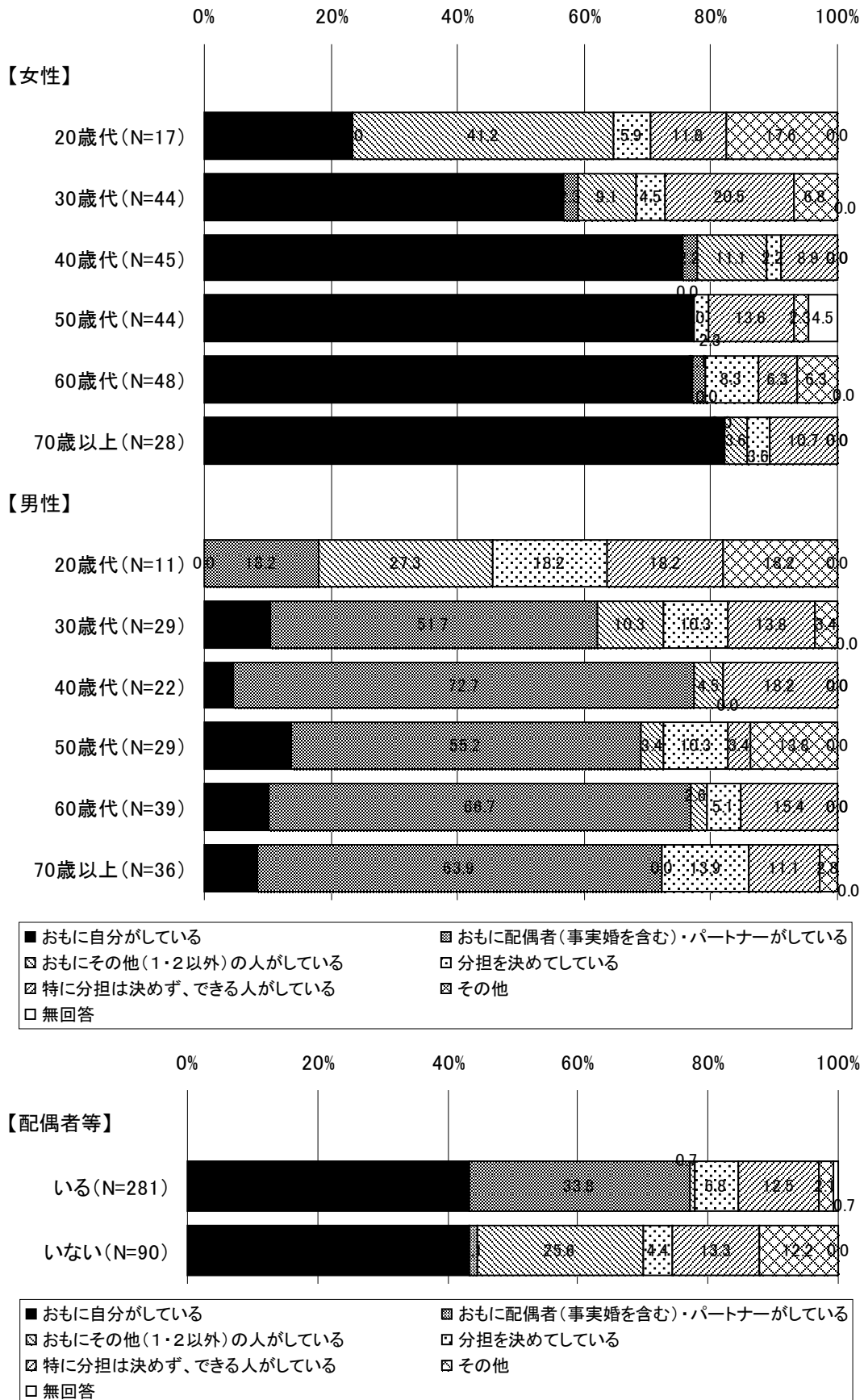


【属性別の傾向】

性別では、「女性」が「おもに自分がしている」(69.5%)で高く、「男性」(9.0%)との差が大きい。「男性」は「おもに配偶者」(59.0%)が高かった。

性別・年齢別では、女性は「40歳代」以上からすべての年齢で、「おもに自分がしている」人が7割を超えている。

図 3 属性別の家事の担当



(3) - 1 家事についての考え

配偶者（事実婚を含む）・パートナーがいる人に家事に対する考えを聞いたところ、男女の意識差が非常に大きい結果になった。女性は「配偶者にもっと家事を分担してほしい」とする人が最も多く、いっぽう男性は、「家事は女性がおこなうほうがよい」とする役割分担を肯定した考えを持つ人と、「分担をしたいが家事の仕方がよくわからない」と答える人が多かった。

問3-1 配偶者（事実婚を含む）・パートナーがいる方のみお答えください。
 （それ以外の方は問4へ）
 家事について、あなたはどのように感じていますか。（〇は1つだけ）

家事についての考えは、女性が「配偶者にもっと家事を分担してほしい」（32.3%）「家事と仕事を両立していることを思いやってほしい」（24.1%）と高く、男性は「家事は女性がおこなうほうがよい」（18.7%）「分担をしたいが家事の仕方がよく分からない」（17.9%）が高かった。

図 4 家事への考え

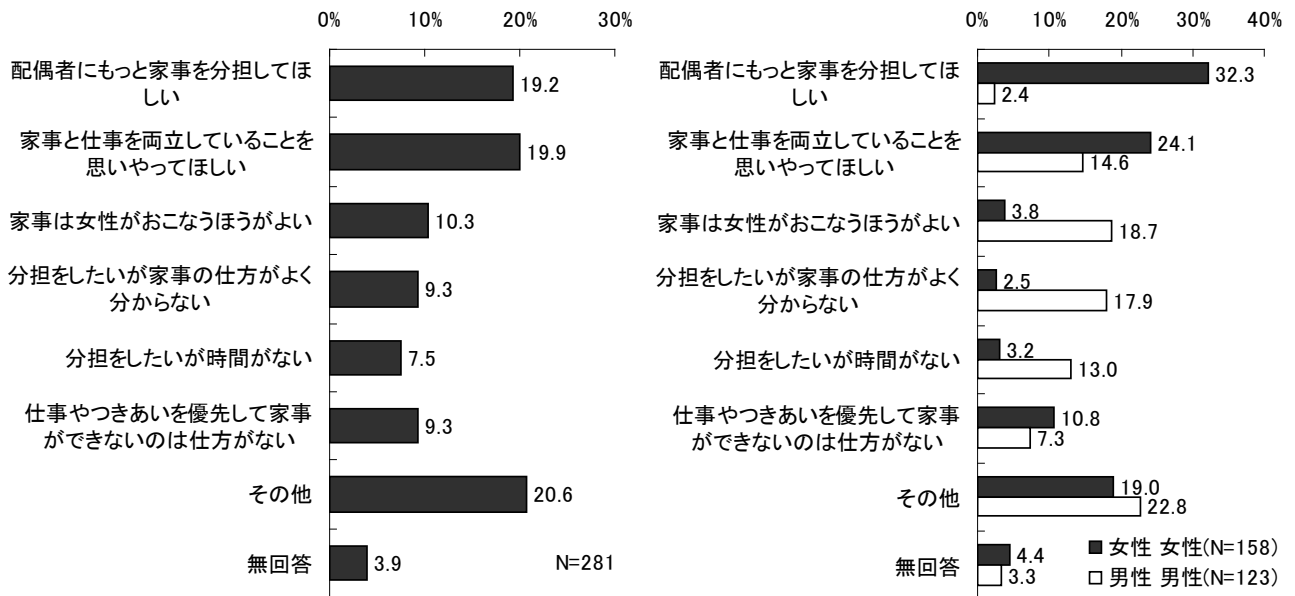
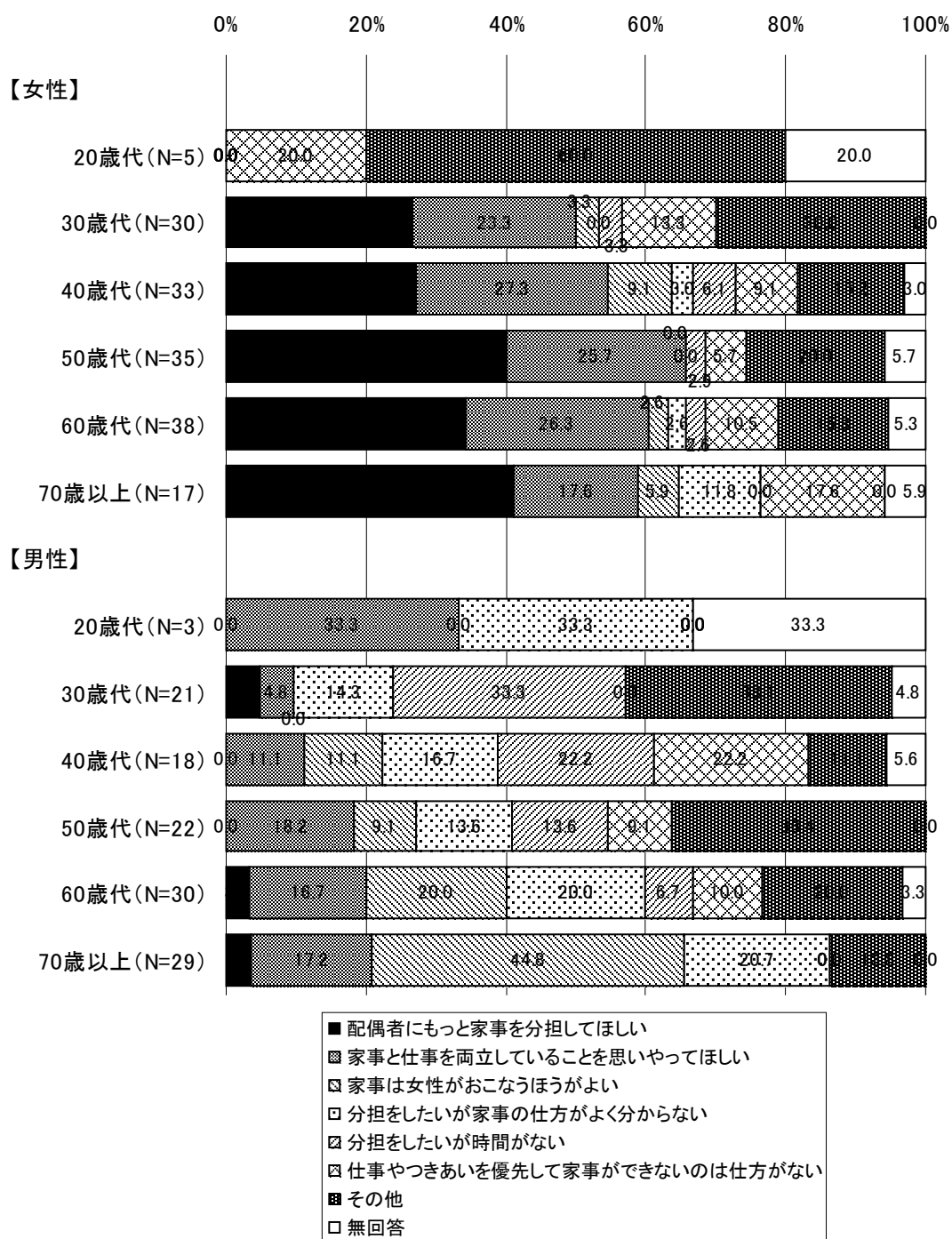


図 5 属性別の家事への考え



(4) 安心して子どもを産み育てていける社会にするため必要なこと

女性も男性も「男女ともに取れる育児・介護休業制度の活用と社会環境を充実する」とした人が最も多い。次に「親の就労形態や通勤時間に応じた保育施策をすすめる」「働く時間の短縮をすすめるなど労働条件をよくする」が続いている。

性別でみると、男性は「働く時間の短縮をすすめるなど労働条件をよくする」が次に、女性は「親の就労形態や通勤時間に応じた保育施策をすすめる」が次に必要としている。「家計や教育費についての相談窓口や経済的支援策を充実する」は、男性が女性に比較して多くなっている。

問4. 安心して子どもを産み育てていける社会にするために、あなたはどのようなことが必要だと思いますか。もっとも必要と思われる順に3つ選び、番号をご記入ください。

子育てに必要なものでは、「男女ともに取れる育児・介護休業制度の活用と社会環境を充実する」(61.0%)が最も高く、これに「親の就労形態や通勤時間に応じた保育施策をすすめる」(48.2%)、「働く時間の短縮をすすめるなど労働条件をよくする」(45.7%)、「家計や教育費についての相談窓口や経済的支援策を充実する」(32.7%)。「子育てを助け合う地域の安全・安心なネットワークづくりをすすめる」(30.9%)が続いている。

図 6 安心して子どもを産み育てていける社会にするため必要なこと

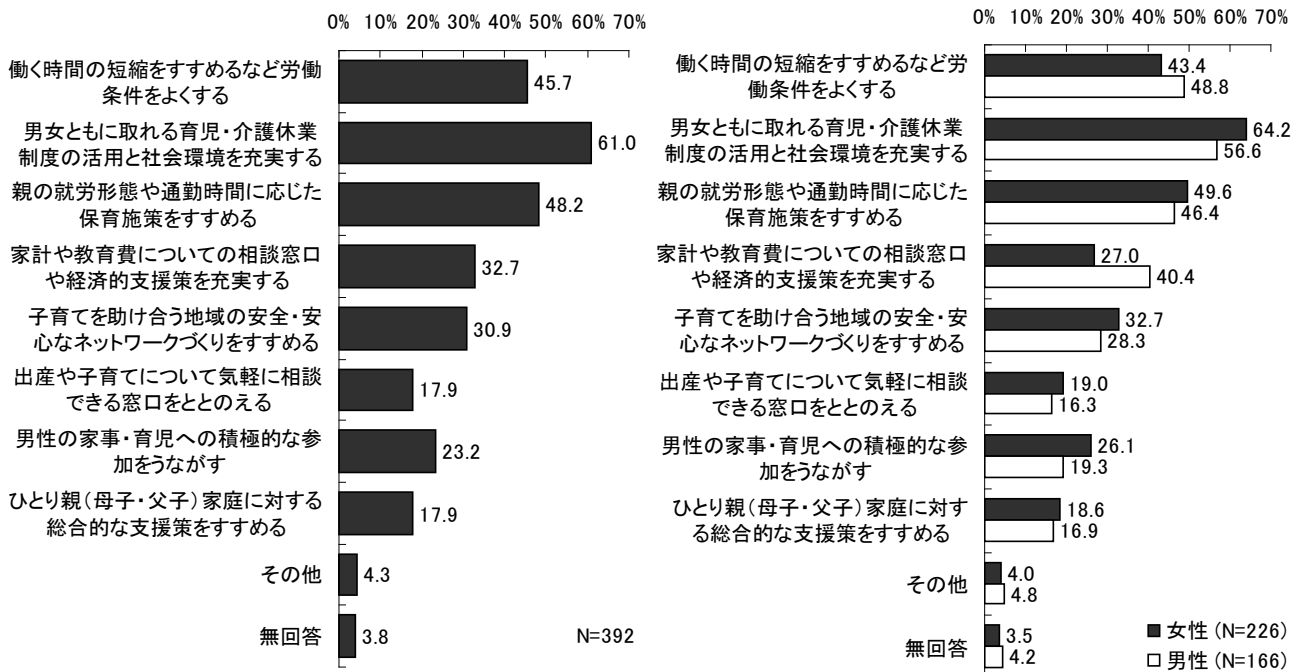
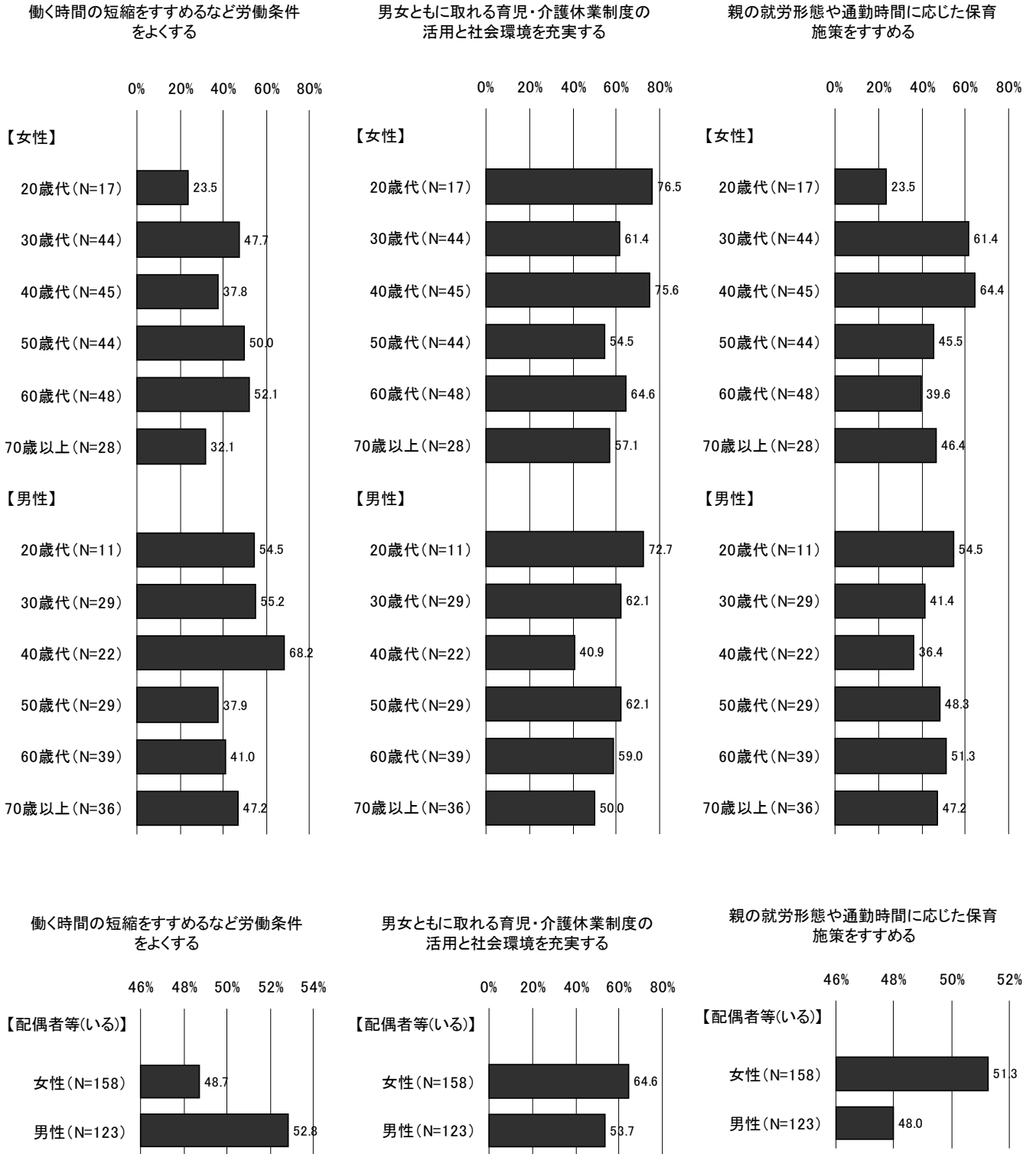


図 7 属性別の安心して子どもを産み育てていける社会にするため必要なこと（上位3位）



(5) 男性の介護への参加を進めるために必要だと思うこと

「介護休業制度を活用できるような職場環境づくりをすすめる」ことを女性も男性も最も必要と考えている。次いで女性は、「女性が一方的に介護を担うことがないよう、家族間で介護の分担について話し合う」「介護について気軽に相談できるような総合窓口をととのえる」を必要としている人が多い。男性は「労働時間の短縮、在宅勤務、フレックスタイムの導入などを企業へ働きかける」が多くなっている。いずれの項目も女性が多く選択している。

問5. 高齢者や病人の介護は、女性（妻・子の配偶者・娘）の役割になりがちですが、男性の介護への参加を進めるために、どのようなことが必要だと思いますか。（〇はあてはまるものすべて）

男性の介護参加に必要なことについては、「介護休業制度を活用できるような職場環境づくりをすすめる」（65.1%）が最も高く、「女性が一方的に介護を担うことがないよう、家族間で介護の分担について話し合う」（56.6%）、「労働時間の短縮、在宅勤務、フレックスタイムの導入などを企業へ働きかける」（55.6%）、「介護について気軽に相談できるような総合窓口をととのえる」（51.0%）が半数を上回るという結果だった。

図 8 男性の介護への参加を進めるために必要だと思うこと

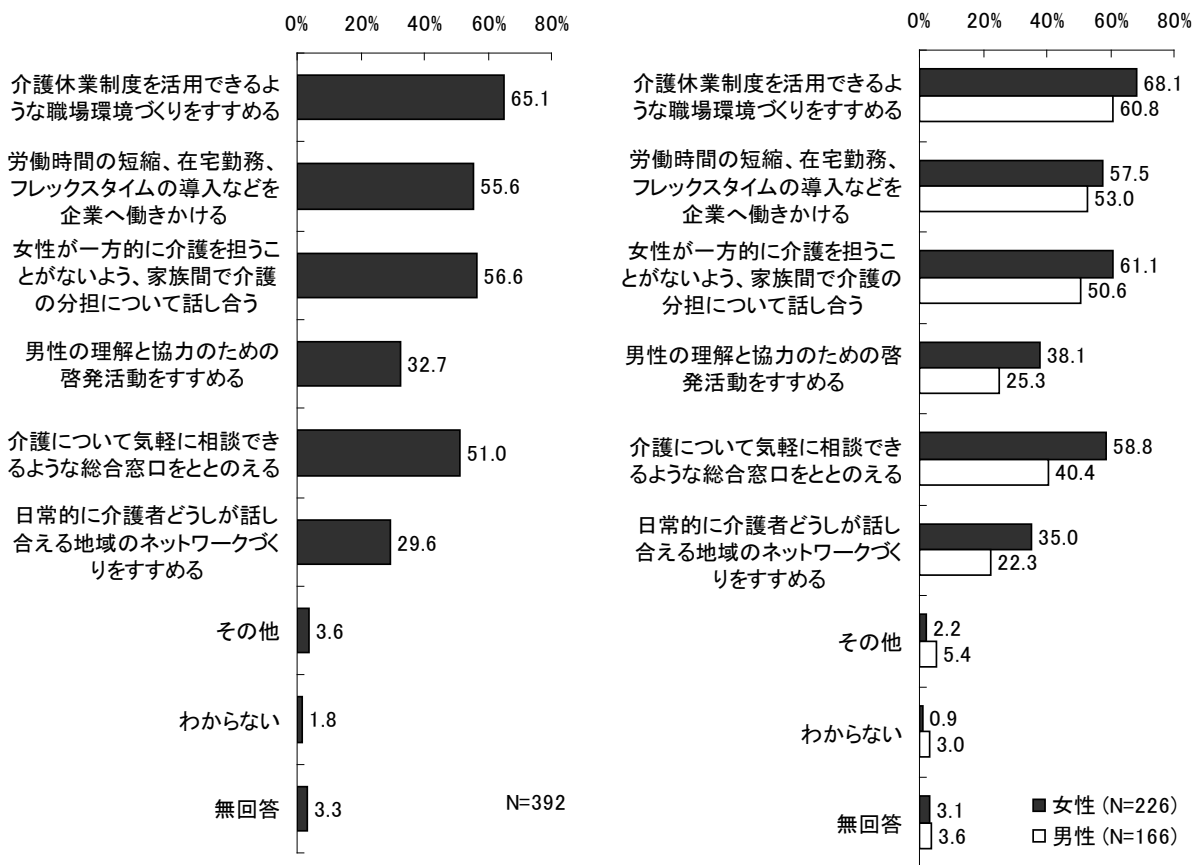
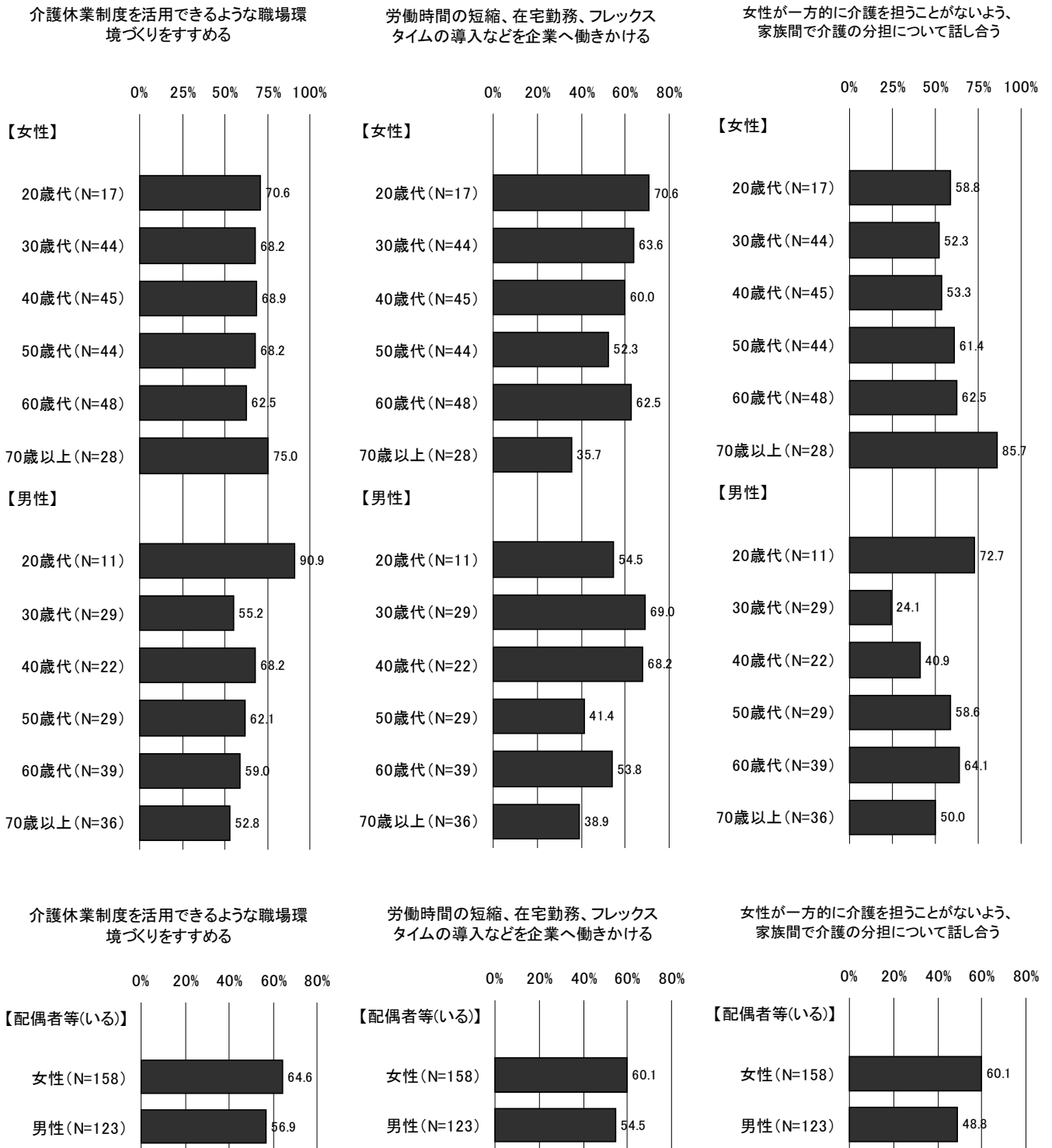


図 9 属性別の男性の介護への参加を進めるために必要だと思うこと（上位3位）



第2章 男女平等教育について

女性も男性も、性に関らず対等であり、平等であるという意識や感覚を形成するうえで、学校教育や社会教育、また家庭教育は重要な役割を果たします。

これを踏まえ、条例では、第9条において教育に携わる者の責務を以下のように定めています。

(教育に携わる者の責務)

第9条 あらゆる分野において教育に携わる者は、男女平等参画社会を実現するため教育の果たす役割の重要性を認識し、男女平等参画の理念に配慮した教育を行うよう努めるとともに、セクシュアル・ハラスメントの防止に努めなければならない。

第2章では男女平等教育について、問6として、女性と男性が平等な関係をつくっていくため学校教育の場で必要なことを聞きました。

問6 女性と男性が平等な関係をつくっていくため学校教育の場で必要なこと

女性と男性が平等な関係をつくっていくために、学校教育の場で必要なこととして、「男女平等の意識を育てる授業をおこなう」「男女平等についてわかりやすい副読本をつくる」「男女ともに学ぶ技術・家庭科教育をいっそう充実する」「性別に関わりなく個性を尊重し、能力と適性をいかした生活指導や進路指導を充実する」「出席簿や名簿、座席、整列など男女を分ける慣習をなくす」「教員、管理職が男女平等教育を推進するよう研修をおこなう」「人権尊重の立場に立った性教育を充実する」「性暴力やセクシュアル・ハラスメントに関する相談機能を充実する」の選択肢のうち、もっとも必要と思われる順に3つを聞きました。

その結果、「性別に関わりなく個性を尊重し、能力と適性をいかした生活指導や進路指導を充実する」が、女性(75.7%)男性(69.9%)と最も多くなっています。

次に「男女平等の意識を育てる授業をおこなう」が、女性(52.2%)男性(54.8%)「男女ともに学ぶ技術・家庭科教育をいっそう充実する」が女性(51.3%)男性(51.2%)と続き、男女差はそれほどありません。

一方、「人権尊重の立場に立った性教育を充実する」について、女性(27.9%)男性(20.5%)「性暴力やセクシュアル・ハラスメントに関する相談機能を充実する」は、女性(21.7%)男性(9.0%)となり、特にセクシュアル・ハラスメントに関する項目の男女差が顕著になっています。

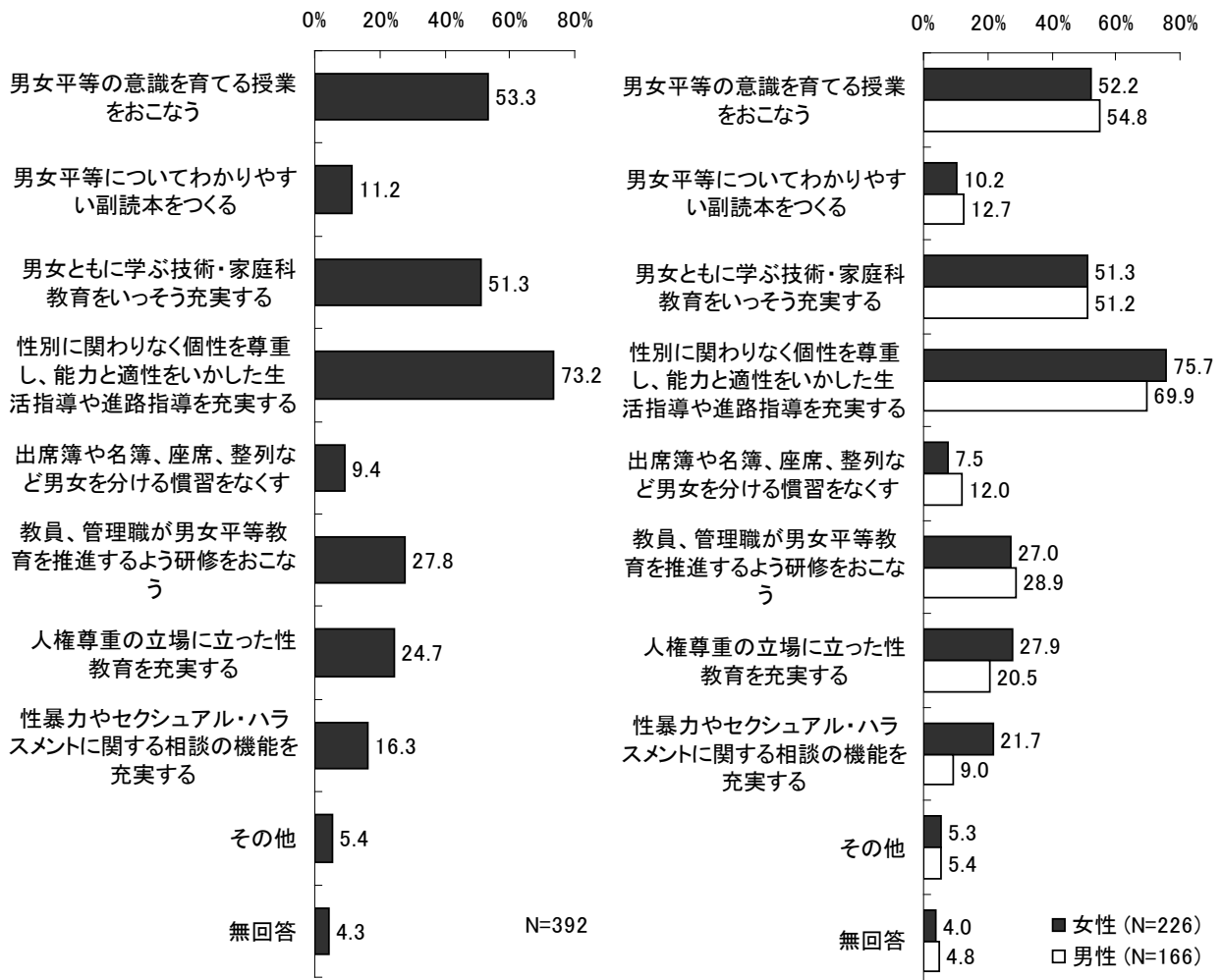
(6) 女性と男性が平等な関係をつくっていくため学校教育の場で必要なこと

女性も男性も「性別に関わりなく個性を尊重し、能力と適性をいかした生活指導や進路指導を充実する」を最も必要としている。

問6. 女性と男性が平等な関係をつくっていくために、あなたは学校教育の場では特にどんなことが必要だと思いますか。もっとも必要と思われる順に3つ選び、番号をご記入ください。

学校教育の場で必要なことでは、「性別に関わりなく個性を尊重し、能力と適性をいかした生活指導や進路指導を充実する」(73.2%)が最も高く、「男女平等の意識を育てる授業をおこなう」(53.3%)と「男女ともに学ぶ技術・家庭科教育をいっそう充実する」(51.3%)が半数を上回っている。「性暴力やセクシュアル・ハラスメントに関する相談機能を充実する」に賛成する女性と男性の差が大きく、女性にとって被害が身近なことがうかがえる結果となっている。

図 10 女性と男性が平等な関係をつくっていくため学校教育の場で必要なこと



※前回調査との比較

「学校教育の場で特に重要だと思うこと」とした平成 15 年度調査では、「男女の別なく能力を生かせる配慮」の項目が最も多く、「技術家庭科教育の拡充」「男女平等意識を育てる授業」と続いている。

今回の調査では、「性別に関わりなく個性を尊重し、能力と適性をいかした生活指導や進路指導を充実する」が最も多い。

次いで、「男女平等の意識を育てる授業をおこなう」「男女ともに学ぶ技術・家庭科教育をいっそう充実する」と続き、設問・選択肢の文言はやや異なるが、必要とする項目については同じ内容になっている。

図 11 属性別の女性と男性が平等な関係をつくっていくため学校教育の場で必要なこと

